も最も激しくロボトミーが糾弾され，精神科医主導で精神外科を否定する決議がなされた経緯がある．もちろん自身も脳の一部を破壊して精神病を治療することに賛成しない．ただし脳手術を生業にしている者として，ロボトミーの歴史を正しく知り伝えることは大切な責務と考える．

ロボトミーとは精神病の治療法の一つで，前頭葉白質切截術（狭義）と和訳される．精神外科手術全般（広義）を指すこともある．多くの問題点を孕み人類最悪の手術・呪われた手術と揶揄されることも多い．精神外科は技術的観点から，第一世代（ロボトミーを含む外科的破壊術），第二世代（定位脳手術），そして第三世代（ニューロモジュレーション）に分類される．今回はQ&A形式で世界そして日本のロボトミーの歴史を辿る．内容は①ロボトミー以前の治療法には何があったか，②誰がロボトミーを始めたのか，③ロボトミーと同時代のライバルの治療法とは，④誰がロボトミーを広めたのか，⑤ロボトミーを好んだ国・好まなかった国とは，⑥どのような社会の反応があったか，⑦日本初のロボトミーは誰が行ったか，⑧日本のロボトミストとは誰か，⑨手塚治虫は何を謝罪したのか，⑩精神外科は今どうなっているのか，で構成される．

現代の脳外科医の視点で分析を加える．新聞・映画・漫画がロボトミーをどのように扱ったか，またグーグルが提供するNgram（過去500年間の500万冊に用いられた5000億個の単語の年次別出現頻度）を用いて，これまでにない視点で切り込む．

（令和3年9月例会）

明治以降の精神療法界の流れと，その中での戦後の神奈川人脈の活躍について

――医療人類学的考察を含めて――

澤野　啓一，針原　伸二

明治以降の日本における精神心理療法の開拓者と成ったのは，森田療法の開祖として知られる森田正馬，精神分析派の丸井清泰の両氏である．元来，薬を処方して病を治す薬師（くすし medicus, physician）と，骨接ぎや鍼灸師（もしくは西欧における理髪外科医 Barber Surgeons）以外の担当分野，つまり「広義の心の問題」は，実際には，洋の東西を問わず，伝統的には，宗教者，易者，祈祷師，巫女，魔術師など，もしくは近親者による担当領域であった．西欧近代医学の導入と共に，精神病学も導入された．しかし幾つも設立された精神病院は，広義の統合失調症などの患者を預かる，或は預かって人格を認める所までが主な守備範囲で，神経質・神経衰弱・強迫神経症などの治療を目指す段階には，中々至らなかった．榊保三郎のアイヌのイムバッコの調査に刺激された森田正馬は，帝国大学卒業直後に郷里土佐の犬神憑の調査を開始し，呉秀三や三宅鑛一などのウィーン留学組神経解剖学の影響も受けつつ，自宅開業の中から大正8（1919）年頃に森田療法を編み出した．この森田正馬を文壇知識界に売り出したのは中村古峡であった．丸井清泰は帝大青山内科出身であるが，明治時代の日本医学界の大ボス・青山胤通に新設の東北帝大精神病学教授候補として指名され，米国留学中に図書館でフロイトの本を読み，精神分析法に興味を抱く．帰国後は，戦前の帝大及び官立医大教授としては唯一，フロイト精神分析学を講ずることになる．森田療法が確立し，慈恵医大の教授にも就任した森田正馬は，森田丸井論争を大々的に仕掛ける．中村古峡は後に私立医専に編入して医師資格を獲得し，大規模精神病院を創設して独自の立場を確立する．矢部八重吉に刺激されてフロイト作品を和訳して刊行し始めた大槻憲二は，神戸中学の先輩である丸井清

泰と連携しつつ活動し始めるが，大槻が治療者として登場するのは戦後に成ってからである．厚木生まれで，丸井の教え子である古沢平作は，後に丸井から離れるが，戦後の精神分析学の発展に大きく貢献した．上記の人々との関連で，神奈川県内で地域精神医療に大きく貢献した古閑義之，岩井寛，藍沢鎮夫，竹山恒寿，武田専，小此木啓吾，山口哲衛，熊田正春などの医師についても触れる．

（令和3年9月例会）

本居宣長の医学文書と一字薬名

吉川　澄美

はじめに

本居宣長（1730～1801）の医学文書のうち，『折肱録』『方彙簡巻』『方剤歌』『済世録』（『本居宣長全集 十九巻』筑摩書房 1974年）は，薬名を一字で表記するいわゆる一字薬名（一字銘）が多用されている．一字薬名を適切に判読しなければ，その全容の理解は不十分だと言える．これらの一字薬名は，曲直瀬流の『能毒』や『衆方規矩』掲載の字と一致するものが認められる一方で，それらには見いだせないものも少なくなかった．

ところで，一字薬名については国語学の視点から島田勇雄氏が1973年に発表しているが，その対象は中世末から江戸時代前期に絞られている．また，遠藤次郎氏らによる薬箱の調査などで個別に扱われたり，『能毒』の研究で言及されたりしたことはある．しかしながら，医書や薬物書を対象に包括的に調べられたことは今まで無く，その使用実態については未知な部分が多い．

富士川游（1865～1940）の富士川文庫はデジタル化事業が行われ，2018年9月より京都大学と慶応大学の各所蔵本を統合したサイトの試行運用が始まっている（https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/rdl/digital_fujikawa/index.html）．これら一堂に会した本の一字薬名の使用状況を網羅的に調べることにより，富士川文庫という範囲内ではあるが，一字薬名の理解が広げられるのではないかと目論んだ．

1. 富士川文庫における一字薬名を使用する本

富士川文庫の京都大学と慶応大学が所蔵する5622件のうち311件に一字薬名が使われているとわかった．同一刊本や同一タイトルなどを除くと253書目である．全体の傾向としては，薬方書・治法書・配剤記録の中で処方（方剤）の構成薬・加減薬に使われるケースが多い．他にも，曲直瀬道三の『能毒』の類本を典型とする薬物書や薬名辞書の見出しや，『切紙』などの要訣集で用いられている．

専門科別では，小児科，産・婦人科，外科・痘科，眼科など広範にわたっている．また，一字薬名を使用する医家・流派は，曲直瀬流とその弟子系統はもとより，永田徳本の伝本，板坂流・馬島流・北尾春圃など後世方派に広く見られる．しかも，後世方派に限られるわけではなく，仲景方を集めた古方派系の本にも見られる．例えば，後藤椿庵の『治法漫録』や岡宗益（定理齋）の『長沙方原』，著者不詳の『古方区別』などである．また，折衷派では和田東郭の『養嬰瑣言』，漢蘭医では吉雄耕牛の『阿蘭陀瘍科之書』や『蘭方吉雄家方紀聞』などに見られる．その他，流派や著者不明の諸家伝薬集などにも一字薬名が使われている．

2. 一字薬名専書・集録本

上記のように薬名の代替として使用する他に，一字薬名そのものに関心を寄せて字の由来となる異名などを調べた専書がある．渋江抽斎の『一字薬名攷』（380余字）や著者未詳の『薬品異名』（230余字）が例として挙げられる．両者とも『輟耕録』由来の一字薬名を集録するなど，曲直瀬流以外のものも多く見られる．その他，『玉朋集』や『三省